



## 文献紹介

ジェーン・ジェイコブズ著 中村達也／谷口文子 訳  
「都市の経済学」(TBSブリタニカ)

松田 弘子

米国の都市問題研究家による、都市の視点からの国民経済論である。

著者の理論は次のようなものである。

経済的繁栄はすべて都市経済の発展の成果であって、従来の国民経済論のように国家という枠組みにとらわれていては現実を把握できない。都市経済は、かつては輸入（注＝著者は「輸入」という語に外国からの輸入だけでなく、国内の他地域からの移入を含めて使用している。）していた財を自力でつくる財で代替することによって成長し、多様化する。輸入代替がうまくいく為には「とりわけ生産財とサービスのイノベーション、および臨機応変の改良を意味するインプロビゼーションを必要とする。」（46頁）種々のイノベーションとインプロビゼーションが日常茶飯に起こり得るような都市の経済は時代に即応したものになり、輸出（注＝移出を含む）の仕事を間断なく続けることができる。そのような創造的な輸入代替都市だけが国民経済を繁栄に導くのである。なお、都市の「輸入」が外国からのものであれ、国内の他地域からのものであれ、多くの物品を代替した結果として生産の多様化がすすむのであり、これが経済的力を産み出し外国への輸出につながる点に注意する必要がある。従来の国民経済論は、都市の輸入代替の重要性を見落としたために、多くの混乱を生じたと言える。

以上の様な理論をもとに、米国・ソ連・イラン・メキシコ・ウルグアイ・イギリス・フランス・シンガポール・日本・台湾等々世界中の国々の経済がなぜ発展したのか（発展し

ないのか）、あるいはなぜ衰退したのか（衰退しつつあるのか）が説き明かされる。さらにまた、帝国の衰退は必然であること、間断のない大規模な軍需生産、ならびに間断のない大規模な貧困地域への交付金や補助金はすべて衰退過程の一部となること、等も明らかにされる。

次々に紹介される事例（TVA、イラン国王とテキストロン社等）はどれも興味深く、それらの豊富な事例に基づいての論理展開は説得力がある。都市経済を専ら輸入代替機能で評価する著者の考え方は一面的という批判を免れないが、経済発展を諸都市の共生的ネットワークのダイナミクスと捉えているところが本著の魅力と言えよう。

なお本著は、1870年代以降の日本経済の発展を高く評価しているが、発展の成功例である日本経済においても地域間不平等の問題が不可避の問題としてあり、経済的に不活性の地域が移植工場の誘致に懸命である事実も紹介している。しかし、著者は移植工場による経済振興に否定的である。別の章で、米国各州の経済発展担当者がハイテク企業誘致に心を砕いている事実を紹介しているが、たとえば誘致が成功したとしても、移植工場は「自生的な工場発展にとって不毛の基盤だ」（116頁）と断定している。日本でも現在米国と同様、ハイテク企業の地域経済への誘致がさかんであるが、果たしてそれらはねらい通り地域経済振興のスプリングボードになるのか、それとも、著者の言通り「不毛の基盤」に終わるのだろうか。本著の論は一つの参考となろう。

（金沢大学経済学部助手）